

はじめに

仏教文学と聞けば、『平家物語』冒頭の「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす」という名文句を思い浮かべがちです。しかし、アジア諸国で恋愛文学を育てたのは、実は仏教でした。また、言葉遊びを發展させたのも仏教なのです。

古代アジアの文化の二大中心はインドと中国です。そのインドの主流の宗教は、祭祀を柱とするバラモン教であり、後にはそのバラモン教が庶民化したヒンドゥー教が広まりました。一方、中国社会の基調は儒教です。ヒンドゥー教も儒教も男尊女卑であって、結婚は親が決めます。ですから、若い男女の恋愛を描いた文学作品などは受け入れられにくかったのですが、仏教は違います。若い男女が出逢い、互いに好きになったとしても、「二人して修行に励みました」とか「太子時代の釈尊とその妃の前世の話です」などといった結末にすればよいのです。

また、インド文学では掛詞が盛んに用いられていたため、仏教でも言葉遊びがしばしば

用されました。經典自身が用いていますし、仏教を題材とした文学作品でも利用されています。弁舌巧みな僧侶が一般信者相手におこなう説法や、芸人たちが仏教を素材として演じた芝居などでは、もちろん、洒落しやれを散りばめて聴衆を楽しませていたようです。仏教関連の悲しい話、はらはらさせる話、滑稽な話、またそれらを題材にした文学作品や語りもの、歌舞や芝居なども歓迎されたでしょう。仏教に基づく文学や芸能が大いに発展したことも、仏教が国境を越えて広がっていった原因の一つです。そうした文学や芸能は、伝わっていった先々の国でさらに独自の展開をとげていきました。

その代表例が日本です。というのは、仏教が入る前から漢字文化が確立していて技術も発達していた中国と違い、日本は独自の文化や技術はあったものの、仏教を通じて思想、建築、美術、音楽、芸能、医学、製紙その他の文化と技術が一気に流れ込んできたため、さまざま分野において仏教が圧倒的な影響を及ぼしたからです。その影響は日本語そのものにも及んでいます。「有頂天になる」とか「機嫌がよい」とか「挨拶する」といった言い方が仏教由来であることは多少知られていますが、「ここち」「心から」「思い知る」「思いつく」「見ず知らず」など、古くからある日本語のように思われているながら、実際には漢訳經典の言葉を和語化したものがたくさんあります。日本人は、そのようにして日本語を豊かにしてきたのであって、そ

うした言葉を用いて恋の歌や物語を作り出し、また仏教を素材とした洒落や芸能を楽しんできたのです。

日本でも仏教の無常の概念が重視されたことは事実ですが、季節のうつろいなどと重ね合わせ、情緒的に受けとめていたうえ、『万葉集』には、無常なればこそ恋ごころがつのつてならない、と訴える和歌がいくつも見えています。さらに『古今和歌集』になると、代表的な歌人の恋歌でも、仏教をからめ、掛詞を用いている作が目立ちます。掛詞は文学の技法ではあるものの、遊び気分で用いれば面白い洒落ということになります。実際、法要の後の酒宴などで詠まれたと推測される和歌には、無常を嘆いたりする歌であっても、言葉遊びを楽しんでいるとしか思えない歌が少なくありません。物語の始祖とされる『竹取物語』、恋歌の贈答を含む歌物語の初めとされる『伊勢物語』にも、そうした面は見られます。『竹取物語』に至っては、仏教がらみのおふぎけの典型です。つまり、仏教と恋と言葉遊びは早くから結びついていたのであって、日本はとりわけその傾向が強かったのです。本書では、アジア諸国における恋愛文学と仏教の関係を検討し、これまでの常識とは異なる仏教の一面を明らかにしていきます。